

川口常孝の歌 屋良健一郎

「歌壇」で篠弘の新連載「戦争と歌人たち」が始まった。第一回となる七月号では、川口常孝をとりあげている。

一九一九年生まれ、川口は、一九四三年九月に半年繰り上げで日本大学を卒業し、同年、第一回の学徒動員で出陣した。満洲や中国北部を転戦し、一九四五年には病のために帰還した。

第一歌集『地平の果て』は、作者の二十歳から二十九歳までの作品を収録しており、一九四八年に私家版が出されていたが、一九九一年に復刻版が刊行されたことで広く読まれるようになった。戦時下に青年期を過ごした作者の、国が傾きゆく不安の中で、学問や友人との熱い向き合い方が垣間見える好歌集である。

- ・殴らむと拳かためて詰め寄れば友の臉は重く垂れたり
- ・戦争を心に持ちて歩みあるわれをかたへの友知るらむか
- ・省線の車窓に握る友が手の熱きを永久に忘れざらむとす

他者と本気で向き合っているからその本気の怒り、衝突。原因は定かではないが、殴りかかろうとする作者とそれを受け入れようとする友の様子を描いた一首目は、人々の生活や行動が抑圧されていたという印象の強い戦時下においても、今と変わらぬ青春が存在していたことを教えてくれる。しかし、友とのそのような時間が長くは続かないことを作者は感じていた。二首目、作者はやがて、出征や疎開といった形で戦争が自分たちの友情に影響

を与えることを察知している。いや、作者だけではなく、友も感じていたに違いない。しかし、そのことを互いに口にすることはなく、それまでの時間をいつも通りに過ごす。やがて、三首目のような別れが訪れたのである。

『地平の果て』にも戦争詠はあるが、戦地の風景を詠んだものがほとんどであるのに対し、一九五三年に仮綴で出され、一九七二年に刊行された『落日』では、死者を詠むようになる。

- ・みづからの墓穴を掘りてその前に殺されむため立てる学生
- ・銃殺音山にとどろき帰り来し兵はあたりの雪とりて食ふ

『落日』の時点では、他の兵による殺害を距離をもって詠んでいる歌が多く、自らが関わった死や戦場での生活は、時を追ってより具体性を増して詠まれることになる。

- ・纏足の少女を囲む日本の兵みな若しわれも一人にて

『月明抄』（一九八二年）

- ・北京大学の学徒の兵のきみに向き銃殺の銃の引き金を引く

『白き憂い』（一九八六年）

- ・天皇制を利用しつくせる軍というものを憎めり銃殺終えて
- ・嘔吐する大便洩らす兵もいて突撃の命付つなり壕に

『兵たりき』（一九九二年）

- ・性病を持たぬ慰安婦を真つ先に軍医が抱けり検診終えて

戦争体験詠が具体性を帯び、惨たらしくなっていく過程に、戦場にいた者が体験を詠むまでに必要な時間の長さを感じる。同時に、右の三首目の感情を、戦場で抱いたありのままのものと考えられるのか、戦後に可能となった冷静な感情と捉えるか、というような判断が、このような歌集を詠む際の難しさだと思ふ。